

1960年代初めのイラン高原から クウェートへの国際出稼ぎ移動

— イラン・メイボド地域のズィールー職人の事例から —

吉 田 雄 介

International Labor Migration to Kuwait from the Iranian Plateau in the early 1960s:

A Case Study of *Zilu* (cotton carpet) Hand-Weavers in Meybod, Iran

YOSHIDA Yusuke

There have been many studies on Iranian immigrants in the Western countries as well as many studies on Arab and Indian immigrants in the Persian Gulf countries. However, relatively few studies have focused on Iranian immigrants in the Persian Gulf. The purpose of this study is to understand specific patterns of labor migration from the Iranian plateau to Kuwait in the 1960s. This paper explores this topic on a micro-level through cases of workers with whom I conducted my field research about the *zilu* (cotton carpet) weaving industry in the Meybod region.

The labor migration from the Meybod region on the Iranian plateau to Kuwait began in the 1950s and these migration trends became common in this region after the 1960s. The immigrants from Meybod first headed to Abadan, a city on the Iran-Kuwait border, where they took a motorboat and smuggled themselves into Kuwait during the night. After arriving in Kuwait, many of them began working as apprentice bakers. Once they started to enter the country officially with a passport and a visa, they ran bakeries and grocery stores. Although it is said that the Iranians tended to become construction workers in Kuwait, this was not the case with the people from the Meybod region.

1. はじめに

(1) 本稿の目的

本稿の目的は、イラン、ヤズド州メイボド地域のズィールー職人が1960年代に命がけでクウェートに渡った経験を聞き取りから再構成することである。



写真1 マスジドにワクフとして納められている古いズィールー（部分）

注：1223年（イスラム暦）の日付とこのズィールーを織ったメイボドの親方の名前が織り込まれている。

筆者は、これまでメイボド地域のズィールー産業・産地の存続を多就業という視点から分析してきた。現在、ズィールーという綿製敷物（写真1）の一大産地であったメイボド産地も昔日の面影を失い、ズィールー需要が減少するに連れ生産者数も激減した。それでもなお十分な仕事量が確保できない今、専門者はごく少数に留まり、大半の生産者が建設業その他と兼業で生産を続けており、ズィールー製織は「副業（*shogh-l-e dovvomī*）」と寂しげに表現する者もいる。これが現在のメイボド・ズィールー産地の姿である。

しかし、これは単に今日的な現象なのだろうか。聞き取りをする中で、廃業者のみならず現役生産者にもクウェートやテヘランへの出稼ぎ経験者が少なからず存在することがわかった。誰もが切れ目なくもくもくと織物を織り続けたわけではないのである。かつてのクウェートへの出稼ぎもメイボド産地という場所の存続に少なからず寄与したのではないか。

ただし、クウェートへの出稼ぎ労働についてはこれまで筆者の考察に含めることが十分にできていなかった。というのも、クウェートを含むペルシア湾岸諸国への出稼ぎについては、イラン人移民全般に関する往時の文献や統計が乏しいのみならず、現在も研究が乏しいからである。そこで前稿（吉田，2012）で筆者は、この分野の研究史の整理と公の統計からの検討を行った。そして、イラン人の海外移住に関する研究は欧米諸国への移住の事例は豊富である反面、イランからペルシア湾岸諸国への移民に関する研究は驚くほど少ないことを指摘した。また、ペルシア湾岸諸国における外国人労働者に関する研究も豊富であるが、その多くが同じアラブ諸国ないし南アジアからの移民労働力移動の研究が中心であってイランからのそれについては関心が払われていないことも指摘した。その上で、受け入れ側であるクウェートその他のペル

シア湾岸諸国の公式統計を分析したが、マクロ・レベルでのイラン人移民に関する分析も難しいことがわかった。

以上のような研究状況から、本稿は、ホスト国・ゲスト国の両面でマクロ・レベルからは分析が困難な1960年代のイラン高原からクウェートへの出稼ぎについて、筆者がズィールー製織業の展開過程を明らかにするために聞き取りを行った数人の男性を通じてマイクロ・レベルから考えてみようとするものである。

(2) 対象とする時期

対象とする時期は次のように設定する。筆者は以前、現役のズィールー生産者30名に聞き取り調査を実施し、論文にまとめたことがある（吉田，2002および2005）。この時は、生産者のペルシア湾岸への出稼ぎ経験については十分に触れることができなかったが、30名中6名にクウェート（5名）ないしドバイ（1名）¹⁾への渡航経験があった。これを時期的に区分すると、(1) 1940年代ないし1950年代前半にズィールー製織業に入門した現役最古参の生産者5名については、クウェート渡航経験者は1名のみであった。一方、(2) 1950年代中頃から後半にかけてズィールー製織業に従事するようになった生産者のなかに比較的クウェートやドバイへの渡航経験者が多かった（16名中5名）。なお、(3) 比較的若い生産者（若いといっても、1960年代に入ってズィールー製織業に従事するようになった人々で、現在は50代から60代になっている）にもクウェート渡航の経験がみられない。以上のように、現役のズィールー生産者についてはクウェート経験の上限と下限がはっきりとする²⁾。

今回は、1950年代末から60年代のクウェート渡航者に注目したい。なお、メイボド地域からクウェートに渡ったのは、バシュニーガン（後述するズィールー生産の中心集落）のズィールー生産者に限定されないが、今回はいずれもバシュニーガン出身者ないしはバシュニーガンの親方の徒弟となりズィールーの生産に人生の一時期を捧げた人々を選んだ³⁾。

1) このドバイへの渡航者は、メイボド地域のズィールー生産者組合の組合員ではあるが、彼の居住地はメイボド地域ではなくヤズド州の南部の集落であり、事情が異なる。

2) 本稿では検討時期に含めなかったが、ズィールー生産が1970年代に入り再び衰退を開始すると、ズィールー産業から離れクウェートやテヘランその他に出かける者も多くなった。ただし、現役生産者に関してはクウェートを目指さなかった。

3) 記録が残っていないために、確実なことは言えないが、1970年代になって再びクウェートへの渡航がブームになったようである。ただし、このズィールー産業が再度衰退に転じてから渡航した者は、現地に滞在し店舗を営んでいる知人や親戚から紹介状を送ってもらい、アーバーダーンやシーラーズなどから空路で正規に入国し、数ヶ月ないし1年ほど知人や親戚の店で働いて帰国している者が多い。また、イランに帰国する前に、イラクのキャルバラやサウジアラビアのメディナやメッカなどを巡礼して帰国した者も

(3) 問題点

今回は聞き取りを中心に分析せざるを得ないため、制約も多い。まず、初期には旅券やビザを取得せず、密航 (*qāchāq*) で渡航した者が多く、出入国の正確な年月日の記録が残っていないことを挙げることができる。同じく、日記を残したり、現地から自宅に手紙なども送っておらず、出稼ぎに関わるイベントの時期の確定が難しい。また、すでに故人となった者も少なくないが、故人の娘・息子たちも親のクウェート体験を詳しくは聞いていない。そして、後述するように、本稿で対象とする地域からのクウェート渡航者は現在では70歳前後の高齢者が多く、ライフイベント経験を尋ねても過去のイベントの経験を正確に思い出すことが難しくなっている。ただし、驚くほど明確に記憶しているイベントも少なくないので、これを基準にクウェートへの渡航がどのようなものであったのか、この点を少しでも解明してみたい。

章構成と手順については、2章においてまず筆者が以前に聞き書きを掲載したガニープール氏のそれを導き糸にして当時のクウェート渡航とそれに関わる事情を整理しておく。次に3章で、送出地と受入国の当時の社会的経済的条件を簡単に検討する。その上で、クウェート渡航の困難さについてガニープール氏の親戚であるA氏の事例から確認する(4章)。また5章において最近までクウェートに滞在した事例に簡単に触れることで、2章と4章の事例がこの地域では特殊事例でなかったことを補足する。そして、本稿で扱った事例が、イラン人のクウェート移住一般ないし一般的な移民理論のどこに位置づけることができるのかを検討してむすびとする。

メイボド人のクウェートの労働は一時的ないし回帰的なものであるもので、本稿では「出稼ぎ」と表現することにする。また、適宜、移民や国際労働力移動といった言葉も使用する。

2. クウェートに渡航するという事 ― G氏の経験から ―

筆者は以前、ズィールー産地の歴史を紹介するために、引退した職人のインタビューを書き起したことがある(吉田, 2011)。その際、クウェート渡航に関する部分については紙数の関係から大半の部分をカットせざるを得なかった。メイボド地域の社会経済的な概略を説明する前に、まずクウェート渡航のブームについて1933年生まれで2006年に没したガニープール(Ghanipūr)氏(以下、G氏)の聞き取りを掲載する。これをズィールー職人のペルシア湾岸への移民について考える手掛かりにしたい(なお、以下の[]内は筆者の質問、()内は筆

多い。パスポート取得が容易になり、かつクウェートで小規模な自営業者となったメイボド人が増えた1970年代に入ると、密航で渡る苦勞はなくなったようである。

者の補足である)。

(1) クウェートに渡るまで

それから少しずつ再びズィールー市場の火が消えた。(イスラーム暦) 1340 (西暦1961/62) 年に、市場が休眠した。誰もがだ。徒弟らは去った。当時、たいていはアーバーダーンやクウェートに行ったもんだ。私も一度、仕事が少なくなり、暇になり、クウェートに渡航した。

[クウェートに行かれたのですか]

クウェート。そう、私はクウェートに行ったんだ、1340年に。私は1年と3ヵ月ただけだ。15ヵ月だ。帰国してからは、二度と行かなかった。苦痛だった。仕事が合わなかった。密航で渡った。我々はアーバーダーンに行ってから、アーバーダーンからモーターボートで密航した。

バシュニーガン (Bashnighān) は、メイボド地域のなかでズィールー産業の中心地であった。G氏の家系は、この集落において何代にも渡り、ズィールーを織り続けてきた職人の家系である。何人もの徒弟を雇用した彼のような親方もズィールー織業の不振ともないクウェートに渡ったのである。どれほどの数のメイボド人がクウェートに渡ったのかは不明であるが、この時期相当な数の男性がクウェートに渡ったようである。

アーバーダーンとはイラン西南部のイラクとの国境地帯に位置する大都市であり、後のイラン・イラク戦争時は戦場となったが、当時はクウェート渡航の拠点であった (図1)。ここからの密航の手段については、次のように続ける。

小さな (モーター) ボートだった。それから夜になって私たちは海に出た。私たちがクウェートに運ぼうとしたんだが、(うまく密航できず) 再びアーバーダーンに戻り、二度目の密航でクウェート入りができた。

クウェートに着いてから、15ヵ月そこに滞在した。私の弟が先にクウェートに行っていて、パン屋 (ヌーンバーイー *nūnvā'ī*) で働いていた。私は1年ばかり滞在してから、ここ (メイボド) に戻り、以後は二度と行かず、ズィールー織りを再開したが、(状況は) 悪くはなかった、再度ズィールー市場が良くなったせいで、買い手が増えて、私も事業を拡大した。



図1 1960年代初めのクウェートおよび周辺の概略

以上の語りから、当時のメイボド地域の人びとの生活あるいは社会経済に大きな変化が生じたこと、つまり個人の人生経験に激変を生じさせた送出地のプッシュ要因が明らかになる。G氏は、イスラム暦の1340年から1341年にかけて1年あまりの期間をクウェートで過ごした。西暦では1961から62年にかけてのことになる。この直前にズィールー産業はかつてない不況に陥ったが、折からの渡航ブームに救われたわけである。ただし、彼の弟を含めてすでに1950年代にはメイボド人のクウェート渡航は始まっており、G氏らは先駆者に続いたことになる。

(2) 渡航が成功してから

次に、クウェートでの仕事についてG氏の語りから確認しておこう。

[当時、クウェートにはメイボドの人は少なかったのですか]

いや、いや、メイボド出身者はたくさん行っていた。当時、皆がクウェートに行ったんだよ。フィールザーバードからも、アルダカーンからも、メイボドからも。クウェートへの道が開かれたんだ。ただし、クウェートも当時は状況がひどく悪かった。(ヌーンバーイー)の店舗には水は無かったし、扇風機もなかった。環境は良くなかったんだ。だから二度と行かなかったんだが、当時はここ(メイボド)での生活状況も良くなかった。

このようにメイボド地域からの渡航ブームを表現する。なお、フィールザーバードはメイボド地域最大の集落であり、アルダカーンはメイボドのすぐ北に位置する都市である。

続けて、当時のクウェートの状況を見ておこう。

[当時のクウェートには、建物は多かったのでしょうか]

いや、いや、建物はなかった。この海岸部の地区のことは、「首長の宮殿 (*qasr-e sheikh*)」と呼んでいたんだが、ここに税関もあった。そんなに発展していなかったな。たとえば、アフマディ地区の外は一面が沙漠だった。

[クウェートは沙漠だったのですか]

沙漠だった。アフマディ地区からファフジール地区まで一面の沙漠だった。私は海のそばにいた。税関のそばだった。首長の宮殿とはこのことだ。首長宮殿と呼んでいたんだ。あまり開発が進んでいなかった。(クウェート)市の上地区はまだなかった。

ある地区の狭い路地に、一軒のヌーンバーイーがあった。私はここで、ヌーンバーイーをした。私は外を出歩かなかった。主人から身分関係の書類を書いてもらった。バーザールの中に入れば、安全だった。書類を持っていなければ、密航者になる。アブドル・ラテーフという名前が書かれた書類を所持していた。

G氏が述べるアフマディおよびファフジール地区とは、クウェート市の南30kmほどに位置する2つの町である(先の図を参照)。ここは石油が発見される以前から都市化していたものの、当時はクウェート市とこれら地区の間は不毛の沙漠が広がっていた。またG氏がクウェートに渡った当時、手狭となったクウェート旧市街の城壁はすでに取り壊されており、彼は旧城壁を目にしていなかったと思われるが、それでも開発はそれほど進んでいなかった。なお「首長の宮殿」は市の北端のペルシア湾に面する地区にあり、そのそばに港の税関もあった。G氏は市の中心部にほど近いところで働き、不法滞在者として逮捕されないように用心深く行動してい

たことがわかる⁴⁾。

アブドゥル・ラティーフは、ヌーンバーイーだった。バーザールの名称は、何と言ったかな。そうだアルザーグ門のそばだ。ここにはアルザーグ門があった。クウェートとはまさにこのことだ。

ここでのヌーンバーイー（パン焼き）とは、西アジアで一般的な無発酵の薄いパン、いわゆる「ナン」を焼く仕事ないし店のことである。パン生地を竈の前で薄く延ばして、パン竈の壁に押し当て、焼き上げる。生地が薄いためにあっという間に焼き上がるので、金属製の鍵棒で引っかけて竈から引き出す。メイボドからの渡航者は、ヌーンバーイーとして働くか後述するように雑貨店で働く者が多かった。

[メイボドの人は多かったんですよね]

たくさんいたよ。私の弟がそこに居た。弟は先に渡航していた。というのも、まだ子供だったのでズィールー織りをする前に、逃げ出したんだ。アーバーダーンに行き、そこからここ（メイボド）のプロカーの手で密航したんだ。

[密航費用はどうでしたか]

誰かが100トマーン（イランの通貨単位）も必要ないと言っていた。ところが（アーバーダーンに）行ったら、1,000トマーン出せ、500トマーン出せと言われた。

[クウェートの暮らしはどうでしたか]

パン生地をこねる機械が3台あって、水はバケツで運んで、空にしてまた運んだ。

苦しかった。この時代は嫌な思い出しかない。

[当時、ズィールー市場は良くなかったのですか]

クウェートに渡った時分は良くなかった。（中略）ズィールー市場が良ければ、行かなかったよ。

プロカーの手で密航した後は過酷な環境のもと、不馴れで肉体的に重労働な職種に従事し

4) 独立する前の英ペルシア湾駐在官(Political Resident)の時代から、ビザなしのクウェート入国は禁止されていた。1952年のクウェートのパスポート規定を参照すると、違反者は3ヵ月以下の懲役または500ルピー以下の罰金、またはその両方が科せられると規定されていた (*The Persian Gulf Gazette*, Supplement, No.1, October, 1953 in *The Persian Gulf Gazette and Supplements*, Vol.III, Archive Editions, 1987, pp.149-150)。

たことがわかる。ズィールー業では徒弟から親方 (*ostād*) へと階梯を上ったが、新天地の新しい仕事では再び下働き = 徒弟 (*shāgerd*) を務めたのである。クウェートにおける労働の酷薄な現実を示していよう。

3. 移住を引き起こした社会経済的な要因

(1) ブッシュ・ファクター

そもそもクウェートに移民を送出したメイボド地域とはどのような地域だったのだろうか。社会経済的な側面を確認しておこう。ズィールー製織業の詳細については、吉田 (2002および2005) を参照してもらい、ここでは最低限の説明にとどめる。

イラン高原の中央部に位置するヤズド州メイボド地域とは、大小合わせて十数の集落からなる地域である。その中心がメイボド地区になる。ただし、メイボド地域の中心地区としての「メイボド (地区)」は台地上に立地する上メイボド (メイボド) と崖下の下メイボド (バシュニーガン、クーチェック、クーチェ・バグ) の合計4集落から構成される狭い地区である。産業構造としては、上メイボドは陶器製造に、バシュニーガンはズィールー製織に特化する他は農村的な集落が多かった。

ズィールー生産が地域全体に普及するのは近年のことであり、元々は1940年代までこのバシュニーガンという集落に限られた家業的な性格の強い産業であった。ところが1950年代に入るとその廉価さからズィールー需要が高まり、バシュニーガンでは増産のために、周辺の農村から男児を労働力として大量に動員するようになった。しかし、G氏が述べるように1961年頃にズィールー不況が訪れた。これはズィールー生産が拡大を始めたその矢先のことであった。特に作業場に2台、3台と織機を所有し、大規模に経営を始めていた親方ほど打撃は大きかったのではないだろうか。

この突然のズィールー製織の躓きを救ったのがクウェートの密航ブームだった。ただし、この数年後、再びズィールー生産がブームとなったことにも注意しておかねばならない。この後に生じた生産ブームの地域への影響は次のように素描できる。空前の生産ブームが始まると、周辺村落から徒弟労働力として大量の男児を使うようになる。こうした徒弟たちはバシュニーガンで技術を習得した上で、しだいに自分の居住コミュニティに作業所を構えるようになり、メイボド地域全域が産地化し、70年代初めには地域全体で1,500~2,000台のズィールー機が稼動していたといわれるほど大産地となった。そして、地元での労働需要の逼迫はクウェートへの人口移動圧力を緩和することになる。

それではいつ頃からメイボド地域の人々がクウェートに渡るようになったのだろうか。高齢

者の記憶によれば、1950年代に入るまでは、メイボドからクウェートに渡る者はいなかったようである。これ以前は、メイボドからの出稼ぎは、テヘランなどの国内の大都市に出かけるか、メイボドの北西に位置する隣の州のナーイン地区に農業労働者として出かけることが多かったようである。

(2) プル・ファクター

そもそも1940年代までは、ペルシア湾の往来は自由にでき、ペルシア湾は天然の境界ではなかった。この時期にも多くのイラン人がクウェートに居住し、クウェート・イラン間を往来していた。ただし、当時はメイボド地域からの出稼ぎはほとんどいなかった。

『石油に浮かぶ国』(牟田口, 1965)と呼ばれたようにクウェートは、1960年代半ばまで西アジア最大の産油国であり、その豊富な石油収入を背景に、開発と建設ブームに沸いていた。G氏は1961年にメイボドからクウェートに渡航したが、これは1962年にクウェートがイギリスの保護から独立する直前のことであった。

クウェートとイランの経済格差の比較は難しいが、1人当たりのGNPの差を参考にすると1963年頃で米ドル換算で22倍程度の開きがあった。もちろん、外国人労働者の賃金はクウェート人に比べ低かったが、それでも母国よりも格段に高い賃金と労働需要の高さがクウェートに西アジア一帯から労働力を引き寄せたのである。

クウェートの人口は、公式の統計でも、外国人、しかも外国人男性の数が極端に多い(表1)。クウェート初の国勢調査は1957年に実施されたが、これによれば、1957年には総人口は20万人をわずかに上回るにとどまったが、1961年の第二回国勢調査では30万人を超え、1965年の第三回国勢調査では46万人を超えた。この数値に密航者・不法滞在者がどの程度含まれているのかは不明であるが、本稿で対象とする1950年代後半から1960年代前半とは、クウェートの人口が急増した時期に当たる。

表1 クウェートの人口

(単位:人)

調査年月	クウェイト人		非クウェート人		合計	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1957年2月	59,154	54,468	72,904	19,947	132,058	74,415
1961年5月	84,461	77,448	116,246	43,466	200,707	120,914
1965年4月	112,569	107,490	173,743	73,537	286,312	181,027

出所: State of Kuwait (1967), p. 23.

クウェートからのイラン人強制送還者数については、1960年代初頭の数値が入手できなかったが、60年代中期に関しては、数千人から数万人単位のイラン人が毎年送り還されていた（表2）。ただし、表に示されるように、イラン人は毎年出国者数が入国者数を大幅に上回っており、密入国した者の中には強制送還扱いにならずに出国した者も多かったことを推測させる。また、イラン人に対する在留許可発行数は1960年代はまだ少ない。

表2 クウェートの入出国者数、強制送還者数、在留許可発行数

(単位：人)

項目	年度	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	合計
入国者数	合計	360,788	440,967	645,431	602,218	762,733	620,169	617,862	657,395	4,707,563
	イラン人	7,720	7,000	13,650	17,083	20,443	18,983	17,915	16,392	119,186
	(イラン人の%)	2.1	1.6	2.1	2.8	2.7	3.1	2.9	2.5	2.5
出国者数	合計	378,612	428,205	615,641	465,534	643,038	613,517	658,879	674,495	4,477,921
	イラン人	20,286	18,777	15,484	29,111	34,496	33,102	28,812	25,909	205,977
	(イラン人の%)	5.4	4.4	2.5	6.3	5.4	5.4	4.4	3.8	4.6
強制送還者数	合計	27,496	18,135	10,286	5,746	8,429	11,696	10,821	12,028	104,637
	イラン人	22,349	14,384	6,638	1,952	2,208	5,751	4,731	4,155	62,168
	(イラン人の%)	81.3	79.3	64.5	34.0	26.2	49.2	43.7	34.5	59.4
在留許可発行数	アラブ人計	23,262	12,395	19,379	26,948	12,466	77,276	98,463	41,177	311,366
	非アラブ人計(A)	9,459	2,954	7,563	8,624	7,478	7,756	11,647	13,010	68,491
	イラン人(B)	1,314	351	1,401	2,816	2,086	1,841	4,012	4,300	18,121
	(Aに占めるBの%)	13.9	11.9	18.5	32.7	27.9	23.7	34.4	33.1	26.5

注：入出国者数からは、クウェート人を除いた。

出所：State of Kuwait, *Statistical Abstract* 各年度より作成。

4. 命がけの密航

[A氏(1936年生まれ)の事例]

(1) A氏のズィールー職人としての経歴

G氏は、2度目の密航で上陸に成功しているが、誰もがこのように簡単に渡航できたわけではなかった。地図上では、イラン・クウェート間の物理的距離は近いため、意外なほど簡単に密航が成功するケースも少なくない一方で、何度も密航に失敗し苦汁を嘗めたケースも稀ではない。あるいは、ボートが転覆して、死亡する事例もあったとのことである。ここでは、G氏と同時期にクウェートに渡航したA氏の事例から、クウェートへの密航の困難さを確認しておこう（なお、A氏はG氏の親戚である）。

A氏は1936年に誕生したが、実母はA氏を生んですぐに世を去った。また、父親もA氏が3歳の時に亡くなり、両親を失ったA氏は父方のおばの元で育てられた。A氏の肉親として

は、3歳年上の兄が一人いるだけである⁵⁾。

最初に、A氏のズィールー職人としての経歴を紹介しよう。A氏の実父もズィールー職人であったが、A氏自身は父親が亡くなったため、家族とは関係のない近所のズィールー親方の元で徒弟仕事をつとめるようになった。これが8歳頃のことである。この徒弟の入門年齢は特段早いわけではなく、当時のメイボド地域では一般的な年齢である。

彼の親方は文字をズィールーに織り込むことはできなかったが、A氏自身は自分で研究して、文字入りの製品を織るまでに成長した。ズィールーに文字を織り込むことができるということは、それなりに技量のある職人であることを示している。数年後に親方として独立してからは、作業場を借りてズィールーを織った。また、化学染料を商人から購入し、糸を自分で染めることもあった。クウェートに渡る直前は2台の織機を経営し、自ら親方職人として働くとともにパールジーンという近隣の集落から通勤する3名の徒弟を使っていた。このようにA氏はズィールー生産に深くかかわっていたのである。なお、21歳の時に結婚もしている。

ズィールー生産の拡大を見込んで撚糸機械（タテ糸に使用する綿糸に撚りを施すための機械）を知人と共に共同出資して購入した。ところが、この投資があだとなった。突然のズィールー不況で経営が行き詰まり、負債を負ったために仕事をたたみ、窮余の一策でクウェートへと向かった。A氏は、クウェートに渡った時期を西暦ではっきりと記憶していた。「1961年」のことである。年齢でいえば25歳前後になっていた。G氏の弟がクウェートに先に渡っていたことがA氏のクウェート渡航を後押ししたとのことである。

(2) クウェートへの道——5度の挑戦——

ところがA氏の渡航は困難を極め、アーバーダーンから5度の挑戦でようやくクウェート密航に成功している。なお、A氏は高齢であり、現在一人暮らしをしているが、筆者が訪問した際はA氏の次男に同行してもらった。ただし、高齢であるため、記憶が極めてはっきりしている部分と、あいまいな部分があったことを断っておく。

まず、最初の密航は、暗くなってから密航者200人程度で歩いて海岸に向かった。朝になって、ボートに20人が乗込んだが、途中でボートが故障してしまった。結局、午後になって、引き返すことになり、この時は、2時間以上かけて炎天下の下を歩いて戻らねばならなくなった。

2回目の渡航については詳しく覚えていなかったが、この時も失敗している。3回目は、ボ

5) なお、A氏の兄もズィールー職人であったが、彼はクウェートには渡らず、革命前はイラン南西部のシーラーズ市にあった政府の授産施設でズィールー製織の指導員をしていた。

ートで密航するのではなく、冷凍車の床の下に隠れて陸路で国境を超えようとしたが、発見されて、これも失敗している。船だけでなく、陸上ルートも使用したようである。

4回目は再び海上ルートで渡航を試みたが、この時も失敗している。そしてこの時が最も厳しい経験だったとのことである。この4回目は、トルーシャ（ペルシア湾岸のアラブ人地域のこと）地方の商人と身分を偽り30名ほどでクウェートに向かったが、遭難して、クウェート領内のブーミヤーン島で3日ないし4日野宿することを余儀なくされた。陽を遮るものがなく、皮膚が日焼けで焼けた状態になった。隣の島の道路を走る自動車が遠くに見えたという。結局、ブーミヤーン島を通りがかった船に救助され、アーバーダーンに戻ることができた。

この後、資金を使い果たしたため、A氏はアーバーダーンで2ヵ月ほどヌーンバーイーとして働いて密航費用を貯めてから5回目の密航を試みた。この時は、国境警察（*zhāndār*）に賄賂を支払い、モーターボートでの密航が成功した。

(3) アーバーダーン (Ābādān)

次に、G氏もA氏も触れたイラン内陸とクウェートのハブとなったアーバーダーンという場所について確認しておきたい。

先の図1に示されるように、アーバーダーン市は、ペルシア湾の最奥に位置し、シャッターアラブ川とカールーン川にはさまれた巨大な中洲の一面を占める国境の大都市である。アーバーダーンは、第二次世界大戦以前からイランの石油産業の中心地であったが、イランの石油産業の発展にともない、イラン各地から出稼ぎが流入することで巨大化した。

イラン最初の国勢調査である1956年センサスでは、アーバーダーン市の人口は226,083人となっており、これはイラン第5位の都市規模であった。しかも首都テヘランを除いた第2位から第5位までの都市の人口はいずれも20万人台であったから、当時のアーバーダーン市はイラン西南部で最大の都市というだけでなく、イラン全土でも最大規模の都市であった。また、1966年センサスでもイラン第5位（272,962人）であった。一方、メイボドの属するヤズド州の州都ヤズド市は1956年センサス時点では、イラン第15位の都市（63,502人）であり、メイボドから目と鼻の先にある州都は出稼ぎ先としては重要性が低かった。

また、アーバーダーンは、クウェートとの物資や人間の交流の拠点となった。地理的位置に恵まれただけでなく、先に述べたようにイラン有数の大都市であり、密航費を稼ぐための仕事先も豊富で、クウェートに向かう拠点として最適だった。また、ここにはブローカーも存在し、メイボド出身のブローカーもここに拠点を設けた。

A氏の密航を引き受けたブローカーは、最初の密航に関しては、メイボド出身者でメイボド

にもアーバーダーンにも自宅を所有した人物であった。しかし、先述したように、この人物に依頼した密航は失敗に終わった。そこで、2回目から5回目までは、地元のプロカー X 氏に依頼した。A 氏に言わせれば、メイボド出身のプロカーは金がなければ相手にしてくれなかったが、アーバーダーン出身の X 氏は親切で、密航費用がなければ費用が貯まるまで待ってくれた、という。また、A 氏はこの2人の他にもアーバーダーンにいたプロカーの名前を挙げてくれた。

(4) クウェートとメイボドの往復

こうして A 氏はクウェート渡航に成功すると、他のメイボド出身者と同じくヌーンバーイーとして3年間クウェートで働いた。そして一度メイボドに戻ったものの、アーバーダーンから再びクウェートに密航して、3年弱クウェートで働いた。さらに3度目の密航では半年、4度目の密航でも半年ほどクウェートで働いた。いずれも、アーバーダーンのプロカー X 氏の手でクウェートに密航した。

最初にクウェートに密航した際には、クウェートにはイラン大使館がまだなかったとのことであるが、4回目に密航した際に、クウェートのイラン大使館でパスポートを入手した。そして、パスポートを取得した5回目のクウェート渡航は、正規のルートで入国した。この後は、4カ月ほどクウェートで働くと、家族の待つメイボドに戻って4ヵ月ほど過ごし、再びクウェートに戻るといって生活を繰り返し、2004年までクウェート・メイボド間を行き来した。クウェート行きの船はアーバーダーンとホラムシャハルから出ており、テヘランとエスファハーンからは航空路線もあり、交通手段は飛行機を利用する場合も船を利用する場合もあった。

なお、A 氏のクウェートでの職業は、最初の7、8年はヌーンバーイーの助手だったが、その後は2人の共同出資者とともに数年間、ヌーンバーイーを自営した。ヌーンバーイーの客はイラン人もアラブ人もいた。その後は、最後にクウェートから帰ってくるまで、ずっと雑貨店の店員として働いた。なお、雑貨店は経営者のイラン人店主の他に A 氏ともう一人店員がいた。1979年にイランでイスラーム革命が起ると、クウェートに滞在するメイボド人は少なくなった。この例にもれず、A 氏もイラン・イラク戦争の間はクウェートに渡行していない。

先の G 氏はクウェートからメイボドに戻ると二度とクウェートに渡ることはなく、ズィールー製織を再開した。他方、A 氏は G 氏と異なり最近までクウェートとメイボドを往復した。この違いを生んだのは個人的な事情であろうし、年齢の差も大きいかもしれない。筆者が現役のズィールー職人に聞き取りをしたクウェートおよびドバイ渡航経験者6名の事例では、4名については1～2年の滞在と短く、1名については3度密航したが25歳で結婚してからは渡航を

止めている。そして、1名（これが後述するC氏）のみが長期間メイボド・クウェート間を行き来した。現役のズィールー生産者については、G氏のような1度のみの渡航経験者が少なくないのである。

A氏は先のG氏と異なり、パスポートを取得し、何度もイラン・クウェート間を移動したが、A氏の事例からは、密航ではなく正規のクウェート渡航に関する興味深いいくつかのことが指摘されよう。その一つが、パスポート取得後の回帰的な移動パターンである。出稼ぎ者は家族から離れた場所で長期間就労するため、留守家族との生活の地理的・時間的な分断に伴い通信・連絡の困難が問題となる。この長期間家を留守にすることから生起する家庭生活上の諸問題の発生を防ぐために、A氏はクウェート・メイボド間で回帰的な移動をした。もちろん、ビザの問題で数ヶ月単位で移動しなければならなかったという事情もある。

二つ目は、出稼ぎ先の就労が、当初の賃労働形態から営業形態に変化した点である。しかも、同郷の仲間へ出資して、共同経営者になっている。しかし、これは賃労働形態から営業形態への不可逆的な移行ではなく、A氏のように再び賃労働形態に戻るという可逆的な移行形態であった。同郷のネットワークやソーシャル・キャピタルを利用しながら、外国人としてクウェートで柔軟に仕事をしたことがわかる。

5. ズィールー生産者の一般的なクウェート渡航

さらに数名のクウェート経験を検討することで、G氏やA氏の経験が特殊な経験ではなくメイボドからのクウェート渡航者の一般的な経験であったことを確認しておきたい。

(1) あるズィールー職人兄弟の事例

まず、バシュニーガンのズィールー職人B氏（以下、「長男」と表記する）とその3人の弟の事例からクウェート経験を検討しよう。B氏（1931年生まれ）は数年前にズィールー生産を引退したが、筆者が集中して調査をしていた2000年代の前半にはメイボド地域でも最高齢の現役生産者の一人であった。

彼には、弟が3人いる（妹は2人）。C氏（1933年生まれ。以下、「次男」）、D氏（1941年生まれ。以下、「三男」）、E氏（1944年生まれ。以下、「四男」）であり、いずれも父親がズィールー職人であった関係で一定の年齢まで家業としてズィールーを織った。長男のB氏こそクウェートの出稼ぎ経験はないが、3人の弟はいずれもクウェートへの渡航を繰り返している。

この3人の中で最初にクウェートに渡ったのが次男である。次男は故人であるが、彼の息子によれば19歳でクウェートに渡航した、と聞いているという。しかし、これでは1952年という

ことになるから早すぎる。おそらくもう少し後になってからではないかと推測される。イラン・イラク戦争が始まるとメイボドに戻ったが、それ以降はクウェートの滞在許可が得られなくなった。そして、彼はクウェートから戻って数年して、メイボドで再びズィールーを織るようになった⁶⁾。

現在バシュニーガーンで雑貨店を営んでいる三男も、次男に2年遅れたが兄を頼りクウェートに密航した。この時には15歳になっていたというから、1956年頃のことになる。当時のクウェートは今のよう大都市ではなく沙漠で、物資はすべてアーバーダーンから運ばれていたと回想する。当初はヌーンバーイーとして、故郷に戻ることなく7年間働き続けた。そのため父親の死に目に会うことができなかったという。その後メイボドに戻ると、25歳頃に再び密航してクウェート入りし、5年ほど働いた。この後、メイボドに戻り結婚したが、再び単身でクウェートに渡った。クウェートでは、クウェート人から店舗を賃借りし雑貨屋を経営した。クウェートでの稼ぎを元手にバシュニーガーンで雑貨屋（「スーパー」と呼んでいる）を営んだが、経営がうまく行かず一度店をたたんで、再びクウェートに渡り開業資金を稼ぎ、再度雑貨屋を開き今に到っている。なお、イラン・イラク戦争が勃発してからはクウェートに渡航していない。

四男も16歳頃（1960年頃）まで父親の作業場でズィールーを織っていたが、父親が亡くなることアーバーダーンの近隣都市であるホラムシャハルに出稼ぎに行き、1年ほどそこでヌーンバーイーとして働いた後、18歳の時（1962、63年頃）にアーバーダーンからクウェートに密航した。6年間クウェートで働き、メイボドに戻って結婚してから再び単身でクウェートに密航した。その後も何度か密航でクウェート・イラン間を行き来した。

(2) 最近までクウェートに滞在したF氏（1943年生まれ）の事例

もう一人、バシュニーガーンの人ではないが、近隣のパールジーンという集落からバシュニーガーンのズィールー親方の元に通って徒弟を務めたF氏の事例を検討しよう。F氏は12、13歳の頃にバシュニーガーンのズィールー親方の通い徒弟となり、その後バシュニーガーンの別の親方の徒弟にもなっている。F氏は親方として独立することなく、18歳前後（1961年頃）でクウェートに渡ったが、この直前までズィールーを織っていた。また彼は当時のズィールー生産者の多くと同じく、文字の読み書きができず、兵役には行っていない。

彼の渡航ルートもここまで紹介した事例と変わらない。アーバーダーンで半年ほどヌーンバ

6) 1992年からは地元の地域研究家グループの支援するズィールー作業場で織るようになった。

ーイーとして働いた後、ホラムシャハル出身のブローカーに依頼して、アーバダーンから操縦士を含め4人がモーターボートに乗り込み、夜間に沿岸沿いに密航した。そのままヌーンバーイーとしてクウェートで6年働いて、うまくパスポートを取得した。メイボドに戻ると、テヘランのクウェート大使館でビザを取得し、再びクウェートに渡ったが、これ以降30年以上クウェートとイランを往復した。具体的には、29歳で結婚してからは、4ヵ月ごとにクウェートとメイボドを往復するようになった。

最初はヌーンバーイーの助手として働いていたが、クウェートに渡っていた同郷のバールジーンの知り合いと資金を出し合い、自らヌーンバーイーを経営するようになった。ただし、外国人が土地建物を取得することはできないので、クウェート人大家から店舗を借りる形にな

った。パン竈などの設備一式は自分たちの所有物であったのでそれを40歳を過ぎた頃に売却して、雑貨店を開いた。雑貨店は、実弟とバールジーンと同郷人1人の合計3人で切り盛りした。

ヌーンバーイーはクウェート市郊外の Mangaf 地区（クウェート市の中心部から20kmほど南に位置する海沿いの地区）にあったため、客にはイラン人労働者も多かった。雑貨店の方は同じクウェート市の郊外でも Old Khaitan 地区にいう別な地区で開業したので、客にイラン人はいなかったという（写真2）。ただし、2006年に再開発で雑貨店が取り壊されてからは、クウェートに行くことはなくなった（パスポートの出入国スタンプとクウェートの滞在許可証を確認させてもらったが、2006年年末に短期間クウェートに渡航したのが最後であった）。

図
版
略

写真2 F氏とクウェートの雑貨店の店内（日付は1998年5月15日となっている）

6. おわりに

最後にメイボドからクウェートへの渡航の要点をまとめておこう。メイボド地域からクウェートへの渡航は1950年代には始まっていたが、1960年代に入って生じたズィールー産業の不況がクウェート渡航を加速した。そして、国境の都市アーバダーンがクウェート渡航の拠点となった。夜に小型のモーターボートで沿岸沿いにクウェートに密入航するのが最も一般的な渡航ルートであったようである。もちろん、自力で渡航したわけではなく、ブローカーに金銭を支払い、密航を依頼した。すなわち、この時期にはクウェートに密航するためのブローカーとルートが確立され、ひとつの産業となっていたのである。メイボド出身のブローカーがアーバ

ーダーンに駐在していたこともメイドからの渡航者を増やした要因であったのだろう。

メイボド人の多くは、ヌーンバーイー（パン焼き）として働くか、雑貨店の店員ないし経営者として働くことが多かった。これはクウェートにおける外国人労働者にとって、あるいはイラン人労働者にとっては一般的なことであったのだろうか。

筆者は前稿（2012）でクウェートの国勢調査結果に記載されている外国人の職業統計を分析した。この統計に記載された外国人労働者数は2万人強と少なく、統計から遺漏が多いという欠点はあるが、イラン人は、販売関連の職種や製造業関連の職種、および塗装工、レンガ工・大工・その他の建設業関連の分野で多い。また、クウェートのイラン人不法就労者は、イラン南部のファールス地方南部や沿岸部からやってきたが、文字の読み書きができない者も多く、肉体労働やロースキルの職種に従事したとする研究もある（Cottrell, 1980, pp.246-7）。

また大野（1971）は、1964年ないし1966年の調査でイランの5つの農村の社会経済状況を描写しているが、その内、アーゼルバイジャーンのキリスト教徒アッシリア人の村のみでクウェートへの密航による出稼ぎが多かったことを記録している。この村では第二次世界大戦以前から、大工として北米や南米を含む海外への出稼ぎ労働が多かったようであるが、調査の数年前からクウェートの出稼ぎがもっぱらになったという。大野は「クエイトにおける石油景気の影響による建築景気から労働者が必要とされ、クエイト周辺の国々から労働者が集まってきた。イラン各地からも数多く出かけるようになった。イスラム教徒は主に煉瓦積み、キリスト教徒は大工職、ペンキ塗装職として働くものが多い（p.273）」としている。また、この村からは既婚者はほとんどクウェートに出稼ぎに行っていない。

国勢調査の傾向も大野の調査結果もメイボド地域の事例とは大きく異なる。同じ密航でもメイボド人の従事した職種はパン焼きが多く、後に雑貨店主ないし店員に転じている。一般的な建設労働者や大工は多くない。また、既婚者も少ない。この点で同じイラン人というカテゴリーでもって出稼ぎ労働をくくるわけにはいかないのである。そして、メイボド出身者のヌーンバーイーないし雑貨店への集中は、メイボドからの移民者に独自のネットワークが形成されていたことを示す。「移動の動きはいったん始まると、社会過程としての移民の動きと自ら維持するようになる（カースルズ&ミラー, 2011, p.37）」というように、先駆者を模倣し血縁や地縁を活用することで移動コストを下げる移民のネットワークや社会関係資本の存在が移民・移住研究では良く知られている（例えば、ストーカー 1998, pp.35-36やカースルズ&ミラー, 2011の第2章）。メイボド人のクウェートへの出稼ぎにもそれが当てはまる。

また、クウェートとメイボドという2つの地域は最初から直接に結びついたわけではなく、アーバダーンという場所を通じて結びつき、ブローカーがその橋渡し役となった。やがてパス

ポートを取得し、滞在許可を得た者は、クウェートと直接に結びつくようになった。この点は一般的な移民・移住理論の中でどのように位置づけることができるのだろうか。この点を最後に検討しておく。

移民から定住の段階としては、一般的に単身で若者が移民すると、移民のネットワークが形成され、移民先でのコミュニティ形成や定住過程が促進され、滞在期間が長期化すると配偶者や子供を呼び寄せ家族を形成するという図式が一般的に想定されている（カースルズ&ミラー、2011、p.37）。ただし、この図式はクウェートではなく、むしろメイボドからテヘランなど国内の大都市に出稼ぎや進学に出た者には良く当てはまる。

一方、A氏の事例のまとめで検討したように、あるいは第5章で補足したように、メイボドからの出稼ぎ者は単身でクウェートに密航した。パスポートの取得が難しかった当時は何度も密航する者も多く、一度クウェートに渡ると、不法滞在者として検挙されなければ数年間は帰国しなかった。それではなぜ、パスポートを持たずに密航しなければならなかったのだろうか。当時は兵役を終えなければパスポートを取得することができなかったからと、彼らは口をそろえて主張する。一方、うまくパスポートを取得できると、同僚と交代で数ヶ月ごとに家族の住むメイボドと単身赴任先であるクウェートを往復するようになった。この点、家族を呼び寄せクウェートに定住することはなかった。また、仕事についても当初は、雇われてパン屋や屋雑貨店の店員をしていたが、クウェートの生活に馴れると同郷者と共同出資して、ヌーンバーイーヤ雑貨店という小規模自営業者になった。しかし、これも自営の経営者から雇われ店員に戻っているように、フレキシブルなものであった。このようにメイボドからのクウェート移民の事例では、一般的な移民過程の成熟はそれほど進まなかったといえる。

参考文献

- 大野盛雄（1971）：『ペルシアの農村』、東京大学出版会。
- カースルズ、S. & ミラー、M. J.（関根政美・関根薫監訳）（2011）：『国際移民の時代』、名古屋大学出版会。
- ストーカー、ピーター（大石奈々・石井由香訳）（1998）：『ILOリポート 世界の労働力移動』、築地書館。
- 牟田口義郎（1965）：『石油に浮かぶ国：クウェートの歴史と現実』、中央公論社。
- 吉田雄介（2002）：イラン・ヤズド州メイボド地域におけるズィールー織業の展開過程、人文地理、54巻、63-79頁。
- 吉田雄介（2005）：イランにおける手織物生産の存続と多就業化の関係——ヤズド州メイボド地域のズィールー製織業を事例として——、地理学評論、78巻、491-513頁。
- 吉田雄介（2011）：ズィールー（綿絨毯）生産の伝承と歴史——イラン・ヤズド州メイボド地域の職人からの聞き取り——、関西大学 東西学術研究所紀要、44輯、211-242頁。
- 吉田雄介（2012）：イラン・イスラーム革命以前の湾岸アラブ諸国へのイラン人労働力移動、関西大学 東西学術研究所紀要、45輯、297-324頁。

Cottrell, A. J. (1980) : *The Persian Gulf States*, Johns Hopkins University Press.
State of Kuwait (1967) : *Statistical Abstract*, The Planning Board Publication.